動く春画ふぇす

提案先: 多摩美術大学 芸術学科 様

提案者:

意図

高校生の時、春画に関するスピー チをした。それは同級生の間で話題となり、その後沢山の人 に「すごいスピーチをしたね」と言われた。どうやら「 は性的な話が大好きなおかしな人」という 話が広まっていたらしい。間違いではない。間違いではないが、 大間違いだ。今の日本では、性を恥ずべきもの、隠すべきものという感覚が浸透していて、悪い意味で敏感になっている。性的な話をするとすぐに色眼鏡で見られたり敬遠されたりす る。しかしそれは変だ。性への興味は人間にとって自然なも のである。それを無理に隠そうとするのは不自然だ。嘗て日本には性を笑い、楽しみ、親しみを持つ素晴らしい文化があった。それが春画だ。「笑い絵」とも呼ばれ、老若男女問わず親しまれるものであった。その寛容で気楽な精神は今の時代に必要なものである。性の話をするだけで、「おかしな人」と単絡的に変換されてしまうような感覚を壊し、春画の面白さを伝えながら、性は大切なものであると同時に、もっと自由で楽しんでよいものだということを、現代の人々、特に私の同級生のような10代から20代の若者に伝えたいのだ。

内容

タイトルにもある通り、これは“フェス”である。従来のよつな展示会要素に加えて、様々な形から春画を知ってもらい、「春画ってこんなに面白いものなんだ！」「性ってこんなに自由なんだ！」ということを知ってもらう。

【開催場所、日程】

開催場所 パシフィコ横浜　展示ホール

日程　　2030年　春

【作品イメージ】

全体のコンセプトは、「春画の魅力を知る」というものである。その上で、「価値観が動く」「春画が動く」「記憶が動く」「あなたが動く」の4つのテーマに分ける。

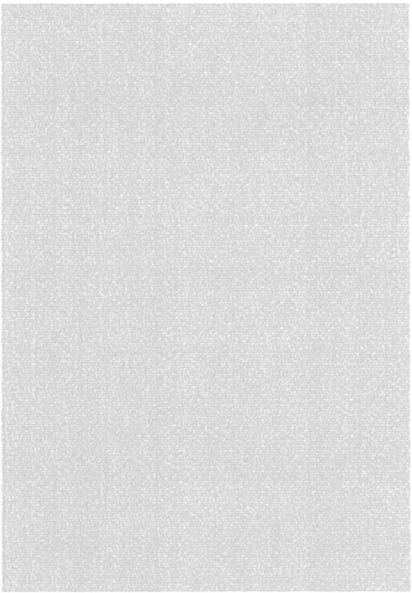
1世界の始まり男女にあり。

「価値観が動く」

そもそも春画には、世界の根源は男女の交わりにあるという思想が流れている。古事記に登場する伊邪那美と伊邪那岐が

交わったことで日本が出来たと記されているように、和合とは本来神聖なものであり、全ての始まりであるということが伺える。春画は昔のエロ本と捉えられることが多いが、そうではなくて、性は私達と切っても切り離せないものであり、生きる上において大切であるという価値観が春画の根底にあるのだということを伝えたい。発表形式は従来の展示会形式とし、昔の性についての考え方や、絵の説明を加えての展示とする。

※展示例



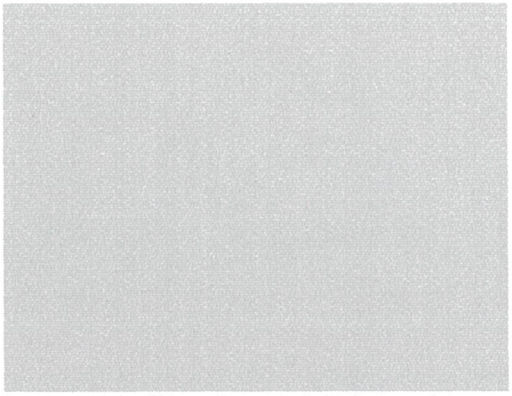
葛飾北斎　萬福和合神

男女性器が顔になったふたりの和合神が手を取り、仲睦まじくたたずんでいる。
この絵は男女の和合が多くの幸せをもらたし、互いに優しく巧みに触れ合えば、この世は甘く心地よいものになる、という教えを表したものであり、春画の全てに通じるテーマである。顔が性器になっていながらも、仲良く肩を組む姿は愛らしいものであり、男性器の方をみると、笑っているようにも見える。

2春画はファッション誌

「春画が動く」

菱川師宣以降、衣服を着た春画が多くなった。春画は男女の交わりの様子を描いているだけではなくファッション誌としての役割も果たしていたのだ。当時の絵師たちは、流行の模様を布団



や衣服に用い、春画からファッションの流行を生み出そうともしていた。さらには、呉服屋から「この柄を用いて春画を描いてほしい」と依頼を受けることもあり、ファッションというものはいつの時代も重要であったということが分かる。性の絵として以外にも、ファッション誌として男性も女性も読み、楽しんでいたのである。ファッションへの興味は現代にも昔にも共通するものである。この催しでは、本来動くことのない春画に動きを加え、ファッション誌という角度から春画を楽しんでもらう。小さめのステージと数メートルの花道を用意してファッションショー形式とし、当時流行した着物の柄や着方などを再現する。

3 古典から春画を学ぼう

「記憶が動く」

中学、高校で学んだ古典の作品も春画に多く見られる。源氏物語や伊勢物語、さらには百人一首。元々ある絵を絵師達が春画として描くことでよりロマンチックに、より熱い恋愛模様が伺

えるようになっている。ここでは、プロジェクションマッピングを利用し、暗い部屋の内部に文字、春画に描かれた男女の様子などを映すことで、客がまるで古典の世界にはいったかの様な演出をする。また、映し出されたものに触れるとその絵が動き出すといった工夫も加えると面白みが増す。中高の教科書で読んだ作品の記憶に色をつけ、甦らせる。これまで関わりの無かっただろう春画と、自分の記憶の中にある古典作品も通じて、つながる機会としたい。

4春画を楽しもう

「あなたが動く」

春画の楽しみは、鑑賞だけにあるわけではない。春画双六や、着せ替え人形、かるたといった様に、子供の頃に遊んでいた絵が春画となり、実際に遊んでいた。この発表は、当時の春画双六やかるたが遊べる参加型のブースとする。さらに、「リアル着せ替え人

形」と称し、当時流行していた着物を着て、いくつかの春画の舞台を再現し写真を撮れるという様な、あなた(客)自身が実際に動いて、春画を体全身で感じてもらうことで、性の自由さ、春画の多面性を理解してもらう場とする。

開催内容は以上だ。広報は主にSNSを通じて行い、ホームページには、知っていると、このふぇすがより楽しめるような春画の知識を掲載する。

【参考文献】

石上阿希　　へんてこな春画に

山本ゆかり　春画を旅する

鈴木堅弘　　とんでも春画